新見公立大学紀要　第38巻2号
pp. 107－112, 2018

研究ノート

認知症声かけ訓練における地域住民の声かけ・対応に関する一考察

－地域住民の声かけと介護福祉士養成課程で学ぶ学生アンケートの比較から－

松本　百合美[1)]*・岡　京子[1)]・大竹　晴佳[1)]・三上　ゆみ[1)]

1）新見公立短期大学地域福祉学科

（2017年12月20日受理）

認知症の人の急増を背景に、認知症があっても住み慣れた地域で暮らせる地域づくりが喫緊の課題となっている。認知症による行方不明問題は、広く一般にも知られるところとなり、地域で支える互助、共助の取組みも盛んに行われているものの、行方不明者の発生件数は増加を続けているのが現状である。そこで、認知症で道に迷っている人への声かけ訓練において、一般の人が行う声かけや対応を分析し、介護福祉養成課程に在籍し、認知症の医学的知識までを学んでいる学生へのアンケート結果との比較から、「記憶力の低下」や「見当識障害」についてより具体的に理解し、それらに対する具体的な対応を学び帰宅支援につなげていくことが重要であることと同時に、地域にある介護や福祉関連事業所等が、発見時の相談窓口となりうることを周知していく必要があることが示唆された。

（キーワード）認知症、声かけ訓練、対応、帰宅支援

１．はじめに

警察庁の2017年6月発表の「平成28年中における行方不明者の状況」[1)]によると、2016年の認知症又はその疑いによるものが15,432人であったと発表されている。2012年の統計開始以降、4年連続で上昇し続け、2013年には1万人を超え、2015年には1.2万人、2016年には1.5万人を超え、増加し続けているのが現状である。

一方、2014年厚生労働省が全国の各市区市町村を対象に各自治体で取り組んでいる徘徊・見守りSOSネットワークに類する事業等を調査した結果、回答のあった1741市区町村のうち35.4%の自治体で、『地域の関係機関等による緊急連絡体制の構築等により、認知症高齢者等の行方不明が発生した際に、行方不明者の情報を共有し、連携協力して捜索活動を行い、早期発見・保護につなげるためのネットワーク事業』を実施しているという結果を報告している。

筆者らも、永田らがまとめた各地の訓練[2)]を参考に近隣地域であるA連合町内会と協力し、2017年3月に認知症によって道に迷っている人に対する声かけ訓練を行った。その結果、一般の地域住民が『道に迷っている認知症の高齢者』に対して声をかける時、その場での発言への対応は充分できていたものの、自宅へ帰るための支援は自発的にはできにくい状況がある[3)]ことを報告した。

現在全国的にも、認知症の人を地域で見守るための声かけ訓練が行われている。様々なパターンの訓練が行われているが、認知症役の人に声をかけて事前に決められている目的地に誘導する訓練と、目的地の設定なしに声をかけてもらう訓練がある。2014年5月のＮＨＫスペシャル「“認知症800万人”時代　行方不明者1万人～知られざる徘徊の実態～」を契機に、他のメディアでも多くの特集を組み、行方不明となった人の移動経路を調べたものもあった。こうした中には、認知症の人が道に迷いながら、通行人等に道を尋ねていたケースもあることが明らかにされている。初対面の認知症の人と会話をしたとき、その人が認知症であるかどうかを判断することは難しい場合が多いものの、声かけ訓練では、認知症の人であることを前提にしているため、声をかけた後に自宅や帰宅支援ができるところへ誘導できるかが重要となる。

そこで、2017年11月1日の時点で、動画共有サイト「YouTube」にアップされている訓練動画をピックアップし、そのうち一般住民が声をかけている様子を確認できるものを分析し、帰宅支援に繋がる訓練になっているのかを確認し、今後の訓練実施における課題を明らかにしたい。また、介護福祉士養成課程に在籍する学生との比較において、一般住民を対象にした声かけ訓練における課題を考察する。

２．研究目的

本研究では、目的地の設定なしに声をかけてもらう訓練において、声をかけた人がどのような声かけや対応をするのかを分析し、自宅や自宅支援ができるところへ誘導ができているのかを明らかにする。また、介護福祉士養成課程

*連絡先：松本百合美　新見公立短期大学地域福祉学科　718-8585　新見市西方1263-2

で学ぶ学生へのアンケート結果と比較し、今後の声かけ訓練の課題を検討したい。

３．研究の方法

１）You Tubeの動画調査

（1）調査内容と分析

2017年11月1日の時点で、動画共有サイト「You Tube Japan」において、『認知症声かけ訓練』で検索してヒットした動画を視聴し、一般の人が認知症役の人に声をかけているシーンの音声と映像が確認できるものを選んだ。その声かけ者と認知症役の会話や対応の音声と映像から、対応の内容を整理した。

（2）倫理的配慮

動画画面はプライバシー設定なく公開しているものであり、無断使用等の禁止事項がないことを確認した上、実施主体等が自治体や福祉公社であり、動画のアップロード者が実施主体と同様または広報用のニュースであることを確認した。

２）介護福祉学生に対するアンケート調査

（1）調査内容と分析

2017年11月に学生に対し、質問紙によるアンケートを実施した。「認知症で道に迷っている人に出会った時、あなたはどうしますか。」という問いに自由記述で回答を求めた。自由記述された内容を意味内容でコード化し、どのような対応方法がどの程度の頻度で抽出できるか分析した。また、1人の回答者が最終的に帰宅支援の対応ができるかを分析した。

認知症高齢者の設定は、2017年3月に我々が実施した地域住民との声かけ訓練と同様に、以下の通り記載した。

・アルツハイマー型認知症の84歳の女性。
・旧姓で名前を名のる。
・どこから来たのかと尋ねると「大阪（歩いてくることは不可能な場所）から歩いてきた」という。
・何のために来たのかと尋ねると「手紙を出そうと思ってきた。ポストはどこ？」と言う。
・持っている手紙には、宛先はこの近隣の住所があり、○○介護支援事業所と記載されている。

○○介護支援事業所の電話番号も書いてある。差出人は、本人が名のる姓は違うものの、名前は同じものが書いてある。

なお、学生は介護福祉士過程で学ぶ1年生54人であり、認知症の中核症状や周辺症状等の「認知症医学的理解」について、介護福祉士養成課程で一般的に使用されるテキストに沿って、医師による授業を既に受けている学生である。また、認知症に関わる地域包括システムや新オレンジプランに関する講義も受けているが、2017年3月に実施した訓練については、概要等は現在2年生の「地域福祉研究発表会」の聴講をしてはいるものの、その内容は声かけや対応の内容については触れられていないため、本調査に関する回答や他者の分析・考察については知る機会はない時点での調査である。

（2）倫理的配慮

筆者が所属する介護福祉学会の倫理規定に乗っ取って匿名性の担保、協力は全くの自由意思であること、協力の有無により成績評価等の不利益もないことを説明し、回答を持って協力を得たものとすることを説明して行った。

４．結果

（1）　You Tubeの動画調査

「認知症声かけ訓練」で検索した結果466件がヒットした。そのうち、住民参加の訓練が行われている動画は19件あった。この19件はいずれも市区町村等の地域自治体単位で実施され、地域内の包括支援センターや介護福祉関連の事業所などからなる地域ケア会議や、地区社協などが主催した訓練であった。このうち動画上で、声かけの音声が確認できたのが7件あった。

7件の動画中、認知症役の人と声をかけた人の会話が聞き取れるものが21組あった。声をかける人が受ける事前のレクチャーの有無と最終的な対応の様子を整理したものが表1である。

訓練目的や事前レクチャーの内容は特定できないものの、声をかけた後は市役所や警察などへの通報をするようにあらかじめ決められていた様子が確認できたのは2件あった。この2件から3人の声かけの様子を確認できた。レクチャーで学習した認知症の人への対応の基本的な態度で、落ち着いた対応ができているように見えた。「警察へ連絡しましょう」や「近所の民生委員さんの家に行ってみましょう」など声をかけ、電話したり予め指定されていた場所（自宅という想定での場所）まで付き添って歩いていた。

事前レクチャーが行われていた残りの3件は、画像上では認知症の人への接し方の基本の講義が行われていた。「近所なので一緒に帰りましょう」や本人の持ち物から自宅電話番号を探して電話する、警察へ電話するなどの対応がなされていた。

声をかける人が参加して事前レクチャーが行われていなかったのは2件だった。そのうち1件は、認知症役の人が最寄り駅から市役所を通って、福祉関連の事業所まで歩くという設定であった。認知症の人が目的地への道がわからなくなったため、歩いている途中、通りかかった人や通り沿いにある商店・会社の人に道を尋ねるというものであった。事前のレクチャーを受けていない人が声をかけたり、認知症役の人から声をかけられて、優しく丁寧に対応をしていた。認知症役の人が自分が行きたい場所を言うの

表１　声かけ対応

１	「近所なので一緒に帰りましょう」と自宅まで送る	事前レクチャーあり
２	本人の持ち物から、自宅へ電話	事前レクチャーあり
３	行きたいという場所を、口頭と指差しで教える	事前レクチャーなし
４	行きたいという場所を聞き出し、「一緒に行きましょう」	事前レクチャーなし
５	休めるところへ誘導する	事前レクチャーなし
６	警察へ電話	事前レクチャーあり
７	警察へ電話	事前レクチャーあり
８	目的地を聞き出し、「一緒に行きましょう」	事前レクチャーあり
９	目的地を聞き出し、「一緒に行きましょう」	事前レクチャーあり
１０	一緒に歩きながら、行きたいところはどこか探しましょう	事前レクチャーあり
１１	息子のところへ行くというが、場所がわからないまま一緒に歩く	事前レクチャーあり
１２	行きたいところがわからないまま一緒に歩く	事前レクチャーあり
１３	息子のところへ行くというが、場所がわからない	事前レクチャーあり
１４	息子のところへ行くというが、場所がわからないため、「家に電話してみましょう」というが、解決に至らない	事前レクチャーあり
１５	息子の名前を聞き出し、「警察へ行きましょう」というが、拒否される 地域のことを知っている人が居るところへ一緒に行く	事前レクチャーあり
１６	口頭で道を教える	事前レクチャーなし
１７	口頭と指差しを教える	事前レクチャーなし
１８	口頭と指差しを教える	事前レクチャーなし
１９	市役所へ一緒に行く	事前レクチャーあり
２０	民生委員宅へ一緒に行く	事前レクチャーあり
２１	社会福祉協議会へ一緒に行く	事前レクチャーあり

に対して、全員が口頭や指差しで道案内をしていた。

(2) 介護福祉養成課程の学生へのアンケート調査結果

配布した54人全員から回答を得た。自由記述で記入された内容を意味内容で整理した。ゆっくり落ち着いて話を聞く、少し休みましょうと声をかけるなど、今まで学習してきた対応の基本的態度を書いている学生もいた。

道に迷っていることに対する対応は、54人の回答から81コードが抽出できた。「近くのポストまで一緒に行く」(33)、「近くのポストを教える」（２）、「時間があれば、ポストまで一緒に行く」（３）、「介護支援事業所へ電話または一緒に行く」(24)、「差出人に書いてある住所まで一緒に行く」(10)、「警察へ電話または一緒に行く」（５）、「病院へ連れて行く」（１）、「市の福祉課へ電話する」（１）、「この場所を教える」（１）「家族に電話する」（１）であった（図１）。

また、「近くのポストまで一緒に行く」のみの対応だったものが54人中15人、「家族に電話する」（家族の電話番号はわからない）と「この場所を教える」がそれぞれ1人ずつで、認知症で道に迷っている状態の人であるものの、自宅に帰れるまでの対応を考えていないものが合計で31.5%（17人）いた。

「介護支援事業所へ電話または一緒に行く」、「差出人に書いてある住所まで一緒に行く」、「警察へ電話または一緒に行く」、「市の福祉課へ電話する」のうち1つ以上を含んでいたのが68.5%（37人）であった。このうち、差出人の住所を探すという回答の中には、「住所がわかるので地図アプリで探して家まで送る」という回答もあった。

５．Ａ地域での声かけ訓練の概要と結果

Ａ地域での、認知症により道に迷っている高齢者への声かけ訓練の結果は実践報告を含めて既に報告[3]しているため、本調査と関連するもののみを再集計して簡単に紹介する。

Ａ地域は、中山間地域ならではの昔ながらの住民間の繋がりが残っている地域であり、341戸が入会するＡ学区連合町内会が地域共同体の中心的役割を果たしている。連合

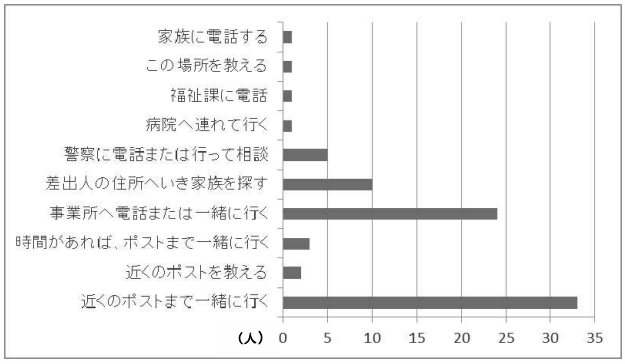

図１　対応

町内会の他、長寿クラブ、若連中（43歳までで構成される若者の会）、防犯組合連合会などがそれぞれ活発に活動している。筆者らの勤務する介護福祉士養成校とは、2012年から始まった学生と高尾学区住民有志とで結成した「高尾学区・新見公立短期大学学生との交流を考える会」通称、高尾交流会から始まり、認知症ケアをテーマに学生と地域住民の相互学習をテーマにした交流会を実施したり、2016年3月には、認知症による所在不明者捜索模擬訓練を行っている。連合町内会役員を筆頭に認知症の人を地域で支えるという意識の高い地域であるものの、2016年の訓練への参加者は殆どが地域役員であり、今回の声かけ訓練は、初めて一般地域住民が参加した訓練となった。

認知症高齢者役は、学生アンケートと同様に、アルツハイマー型認知症の高齢の女性で、実際は隣接の他地区に住んでいるが、手紙を出そうとして道がわからなくなった状態とし、名前や住所を尋ねられたら、旧姓を名のり、住所は誰が聞いても歩いて移動不可能な遠方の地名（実家を想定）として「大阪」と答えるが、封筒に書いてある現在の（本当の）名前や住所を言われたら、これも肯定することにした。持ち物は、投函する宛先・差出人が書かれており、10円切手が貼ってある封筒のみとした。封筒の現在の住所、氏名が記載は、本人確認の材料になるようにした。宛先は『○○介護支援事業所」とし、電話番号も記入しておいた。10円切手を貼って投函しようとする行動から、記憶・判断の混乱を示すとともに、相談先となりうる機関や場所として介護支援事業所を示し、「切手が足りないから郵便局へ行きましょう」など対応の助けになりそうな場所への誘導の理由付けのヒントとした。この設定の高齢者役を、介護福祉関連の専門家が行い、地域の人に声をかけてもらうというものである。

A地域では31人が声をかけて下さった。そのうち声かけの様子をビデオ撮影することを了承していただいた26人の映像を分析した。認知症により道に迷っている状態の人に対して、家まで帰れるように対応をした、またはしようとした人は34.6%（9人）であった。ポストまで一緒に行くなどの対応したのは50.0%（13人）だった。困惑して対応ができなかったのは2人（7.7%）だった。その他が7.7%で、休んでいってくださいや水分補給をした。この結果から、今いる場所もわかっていない状態で道に迷っている人であっても、半数は『ポストまで行けることまで』を目的にした対応であったことが分かった。

また、「ポストの場所を口頭や指差しで教える」が50.0%（13人）だった。そのうち8人はそのまま終了し、残り5人は道を教えたにもかかわらず高齢者役の反対方向へ行こうとする行動や不安そうな様子を察して「ポストまで一緒に行く」という対応に変わった。口頭による道案内なしに初めから「ポストまで一緒に行く」という対応をしたのは19.2%（5人）だった。持っていた封筒を見て、介護支援事業所へ連絡をしようとした人は7.7%（2人）のみであった。

声かけ終了後に、「この後どうしようと思ったか」について質問紙により回答を求めた。回答者は31人であった。①これ以上何もできない、②誰かに相談する（誰に相談するか）、③郵便ポストを教える、④家に帰れるよう送って行く、⑤連絡先を探して電話してみる（どこに電話するか）の選択肢を示し、複数回答で尋ねた結果、「警察に相談する」、「家に送って行く」、「連絡先を探して電話する」のうち少なくとも１つを選択した人は65.4%（17人）だった。

この結果から、認知症の症状として一般的にもよく知られていると考えられる記憶力の低下、「さっき言ったことをすぐ忘れてしまう」人に対し、口頭による道案内（「あの角を左に曲がって、まっすぐ行くと信号があるから、信号を通り過ぎて…」）をする人が半数いたこと、相談や電話する先として『介護支援事業所』や『警察』を思い浮かべる人が少なかったことが分かった。

なお、この訓練では事後アンケートを実施して、この後の対応をどうするかの選択肢に、④家に帰れるよう送って行く、⑤連絡先を探して電話してみるを提示して、家まで帰れるように対応することが必要であることに気づいてもらえるようにした。集計結果では、65.4%の人が家に帰れるように対応をしよう思うという回答であり、アンケートによる教育的効果があったと言えるのではないかと考えている。

６．考察

「YouTube」の画像とＡ地域での訓練の結果から、認知症のため道に迷っている人に対し、事前の打ち合わせやレクチャーなしに一般の人が声をかける場合、認知症役の人が訴える「目的の場所」を案内することが多いことが分かった。

道案内を口頭で丁寧に説明されると、記銘力が低下している状態であれば覚えこめない可能性は高い。また、それに従って歩き出して、目印の建物や信号まで行けたときには、保持や想起がうまくできるかという不安が残る。見当識障害によって自分の今いるところと目的とする場所の位置関係の見当をつけることが難しい人も多いのが実情だろう。また、認知症の人が町中を歩いている時、視線は足元に集中し、周囲に注意が向いていないことが報告[22]され、自宅付近や通いなれた道で迷う場合、いつも何気なく目印にしている建物や看板を見落としてしまうことが引き金になっている場合が多いと言われている。少なくとも、記憶力の低下などの認知症に関する基本的知識は、認知症サポーター養成講座など認知症に関する啓発活動には必ず含まれている内容[23]であり、一般の人たちもよく知っていると思われる。しかしその場で直接「○○へ行きたい」と言われたら、まずはその場所を教えるのは通常のこ

とであろうが、口頭による説明が覚えられない可能性やポストまで一緒に行った後、その人がまた道に迷い家に帰れなくなる可能性までを考えられるような訓練にしていかなければいけないだろう。我々が今後行う訓練においても、これから各地で取り組まれる訓練や認知症サポーター養成講座等の普及啓発活動においても、より具体的に認知症の人の状態がイメージし対応の必要性が分かるようなものにしていくことが重要であろう。

また、介護福祉養成課程で学ぶ学生のアンケートとA地域の訓練の結果を比較すると、持っている封筒から情報を得ることに大きな違いがあった。学生へのアンケートでは質問紙にその情報を書き込んであったのに対し、A地域の訓練では、認知症役の人がこの封筒の現物を持っていたため、気づきにくかった可能性は高いものの、封筒に「○○介護支援事業所」とその電話番号も記載してあったにもかかわらず、そこへ連絡してみると回答した人は7.7%だった。これに対し、介護福祉養成課程で学ぶ学生はまだ十分な学習も進んでいない1年生であったが、介護支援事業所へ連絡または一緒に行くという回答が含まれていたものが44.4%いた。介護支援事業所に相談すれば、その人のことが分かる可能性もある。また、そこで分からなくても、近隣の介護福祉関係の事業所や地域包括支援センターなどの相談窓口へつないでくれる可能性は高い。こうしたことは、介護福祉を学び始めた学生であるからこそ、気づけるものであったのではないかと推察する。しかし、一般住民にとって介護支援事業所が身近なところではない可能性もあり、地域包括支援センターや福祉関連の事業所等の役割や事業所間の連携があることなどについても広報していくことが重要である。

次に、介護福祉を学ぶ学生に対しては、認知症の医学的知識を既に学んでいるにもかかわらず、帰宅支援に至らない回答があった。記憶力の低下や空間や場所の見当識の低下は知っているが、現実の中でどのような困難さとして現れるのかイメージがつかめていない可能性がある。本アンケート実施後、授業において、このケースの場合は帰宅支援を行うことが重要であることを、実際に起こった事例に基づき説明した。今後も、認知症が及ぼす日常生活への影響を学ばせていくことが重要であり、また地域における訓練や認知症カフェなど地域で展開されている認知症の人を支える取組みへの参加を促して行きたい。

今後も筆者らは、A地域での訓練を継続していくつもりである。A地域の住民の訓練への希望は『発展的な継続』である。一般住民、特に若い世代の住民の参加や訓練の広域化などの希望が寄せられている。こうしたことに取組みつつも、今回の訓練で明らかになった課題をフィードバックしつつ、認知症に対する知識が現実の中で生かされるよう認知症に関する学習会が重要であると考えている。また、こうした訓練や取組みは、参加して下さっている方や我々にとっても、自分が認知症になった時をイメージすることに繋げていく必要がある。自分や家族が認知症になった時、近隣の人へどんな困りごとが生じているのか、どのような助けがあればいいのかを発信できるようになることが、認知症の人を支える地域づくりには欠かせないものであろう。

最後に、認知症の人が自宅から離れたところを歩いていて、出会った人が話しかけたり、道を教えたりしていたにもかかわらず、所在不明になっているケースもある。認知症を患っていても、通いなれたいつものコースを歩いて、自分で自宅に戻れていた人が、ある日、突然帰ってこないため家族が慌てて探すというケースも多い[22]。いつもの散歩やいつもの買い物と、何かのきっかけでいつものコースから外れて帰れなくなっている状態をどう見分けて、「行ってらっしゃい。気を付けて。」と見守るのか、「どうしましたか。家まで送りましょうか。」と帰宅を支援するのかは非常に難しい判断であるが、今後も検討していかなければいけない課題である。

謝辞

一緒に訓練をしていただいているA地域の皆様、調査にご協力いただいた皆様に心よりお礼申し上げます。

文献

1）警察庁ホームページ：平成28年中における行方不明者の状況【2017年8月】 https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/fumei/H28yukuehumeisya.pdf
2）永田久美子,桑野康一,諏訪免典子編：認知症の人の見守り・SOSネットワーク実例集,中央法規出版株式会社.2011
3）松本百合美，岡京子，三上ゆみ：認知症の人への声かけ訓練実施による効果と課題―A市B地区での訓練を通して―.日本介護福祉学会大会要旨集,66,2017
4）C県D市役所：地域安心声かけ訓練【2017年11月】 https://www.youtube.com/watch?v=BPEjHbpDPZw&t=145s
5）E市福祉サービス公社：認知症高齢者徘徊模擬訓練【2017年11月】https://www.youtube.com/watch?v=aLUcVD0tmuo&t=192s
6）F市：20141018認知症の方の一人歩き保護訓練【2017年11月】https://www.youtube.com/watch?v=Tqb077-tizU
7）北海道新聞動画ニュース：徘徊する認知症患者を保護 G市で初の模擬訓練【2017年11月】 https://www.youtube.com/watch?v=T9bbmkx0RU4
8）H区認知症徘徊SOS模擬訓練【2017年11月】

https://www.youtube.com/watch?v=iXfHphxks7M
9）I市広報課：支えあおう~地域包括ケアシステム～認知症高齢者徘徊模擬訓練【2017年11月】https://www.youtube.com/watch?v=0BoqyGk2Iiw&t=258s
10）J町社会福祉協議会：J認知症見守りたいによる～認知症を抱え道に迷っている人に対する温かい声かけ訓練～【2017年11月】https://www.youtube.com/watch?v=sUtvcE9tuIg
11）ibarakishimbun1:Kで徘徊模擬訓練【2017年11月】https://www.youtube.com/watch?v=X9Vy_4f2cBU
12）L市：A町B区で認知症一人歩き保護訓練【2017年11月】
https://www.youtube.com/watch?v=_0ZV0g0GUkU
13）M長社協どんちゃんネル：高齢者ＳＯＳネットワーク模擬訓練【2017年11月】https://www.youtube.com/watch?v=8O7YVDMDAfI&t=2512s
14）日南テレビ：徘徊者捜索模擬訓練【2017年11月】https://www.youtube.com/watch?v=pZ2lowZemMo
15）N市広報番組：【認知症対策「徘徊訓練」に潜入調査】【2017年11月】https://www.youtube.com/watch?v=g-2HkNrk9KA&t=755s
16）O県P市：「A町認知症徘徊見守り訓練」【2017年11月】https://www.youtube.com/watch?v=EHoxyBpUJ3E&t=46s
17）Q市Web放送局：トピックスタイム（平成28年2月（4）,Q市高齢者等SOSネットワーク事業【2017年11月】https://www.youtube.com/watch?v=Q0mb3fANnDg&t=284s
18）I市広報課　CITY　NEWS平成28年12月10日放送：「支えあおう～地域包括ケアシステム～認知症高齢者徘徊模擬訓練」【2017年11月】https://www.youtube.com/watch?v=0BoqyGk2Iiw&t=493s
19）R区初！はいかい高齢者お帰り支援議場模擬訓練を開催【2017年11月】https://www.youtube.com/watch?v=U4Xr6P5JFz8
20）認知症Stadium：S市バスにおける認知症声かけ訓練【2017年11月】https://www.youtube.com/watch?v=rnBFVuxZmNQ
21）認知症Stadium：S市営地下鉄との認知症行方不明者声かけ訓練【2017年11月】https://www.youtube.com/watch?v=kyqgsaCd4wg&t=63s
22）NHK[認知症・行方不明者1万人]取材班　：認知症・行方不明者1万人の衝撃　失われた人生・家族の苦悩. 幻冬舎，東京,2015
23）NPO法人　地域ケア政策ネットワーク　全国キャラバン・メイト連絡協議会：認知症サポーター養成講座標準教材　認知症を学び地域で支えよう. NPO法人　地域ケア政策ネットワーク，東京，7-8，2015